

平成 22年 5月 17日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530708
 研究課題名（和文） 近世後期から明治初期にかけての手習塾絵画資料のデータベース化と分析研究
 研究課題名（英文） Making to data base and analysis research on " Tenaraijuku " painting materials from latter latter Tokugawa period to the beginning of the Meiji period
 研究代表者
 鈴木 理恵 （ SUZUKI RIE ）
 広島大学・大学院教育学研究科・准教授
 研究者番号：80216465

研究成果の概要（和文）：江戸時代後期から明治初期にかけての手習塾絵画資料から、成績による座席分け、袴の着用、正座での手習いといった門人のようすが見いだせた。このことから、手習塾は手習いの教場であると同時に、身分制社会における人間交際の規範を体得する場として認識されていたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：How did children write and read the character in Tokugawa Japan? This is the main topic for this paper. We can see them on " Tenaraijuku " painting materials from latter Tokugawa period to the beginning of the Meiji period. In the pictures, children who had the brush in the right hand wrote sitting straight, and children who read the book wore the "hakama". The seat was divided into children by the result. " Tenaraijuku " was recognized as a place where children acquired standard of human association.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：日本教育史

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：手習塾・絵画史料・手習い・師弟関係・黄表紙・絵馬

1. 研究開始当初の背景

手習塾研究には一定の蓄積があるが、従来は文字教育面に研究の重点が置かれてきた。文字習得の必要性や手習塾普及の理由が、幕藩体制下での文字浸透や商品生産経済との関連で説明されてきた。手習塾は確かに読み・書き・算、特に文字を書くことを授ける

場であるが、近年の研究でも言われ始めているように、文字学びが実用的側面だけで説明できるわけではない。また、手習塾を、文字学びも含めて、門人が一日を過ごす場として総合的にみるとらえ方が必要である。そのためには、文字史料による研究では限界があり、絵画資料による分析が必要と考えられる。

2. 研究の目的

近世後期から明治初期の手習塾を描いた絵画資料を収集し、手習塾について環境・人（師弟間および門人間）・モノの視点から分析することを目的とする。

3. 研究の方法

江戸時代後期から明治初期に描かれた手習塾絵画資料を収集し、分析する。

絵画資料を用いることの意義は、従来の文字史料中心の手習塾研究では明らかにできない師弟の身体や、教場の環境・モノを分析できることである。たとえば、師匠と門人はどのような姿態や視線で相対していたのか、どのような衣服を身につけていたのか、どのような教場でどのような教具を使っていたのか、門人はどのような活動をどのような様態でおこなっていたのか、などの観点である。

4. 研究成果

手習塾絵画資料を、書物（絵本・往来物・実用書・教訓書・黄表紙など）の挿絵 27 点、風俗画 3 点、双六 1 点、絵馬 4 点から集めて、教育史的観点から分析したところ、以下のような点が導き出された。

(1) 絵画資料と史実

手習塾場面を歴史資料として使用するには、絵画の性格を把握した上で、その文脈のなかで読み解くことが重要である。絵画は、画工が現実にあるもの、ないものを取りまぜ再構成したフィクションである。あるいは、絵画の使用される文脈に即して、一般的ではない状態が象徴的に大きくとりあげられる場合もある。

手習塾絵画資料には、教場のなかに畳・襖・障子・書物箱などが描かれている場合が少なくない。また、書物箱が描かれた絵画資料の場合、その表書きには「四書」「五経」「史記」「史記評林」「暦算全書」などと書かれている。書籍箱やこれらの書物を所蔵することができた階層は限られていた。つまり、絵画には、富裕な上層民によって経営された手習塾を想定して描かれたものが多いといえる。これは、手習塾絵画資料の多くが、実態を示すことよりも書物の挿絵として美しく整えられた理想像を読者に提示することに目的があったと考えられること、書物を出版するのが江戸、京都、大坂などの都市部であったことや、手習塾場面が挿絵として描かれた書物を購入する階層が一定程度の富裕層であったことなどと関連するのかもしれない。

手習塾では年齢や学習進度の異なる門人が集まっていたので、各員の手本の内容やレベルは異なるのが一般的であったと考えられる。男女では手習う文字が異なった。手本の内容やレベルの違いが如実に描かれているのが図の享和3年（1803）『撫育草』の挿絵である。同史料に描かれた9名の手習い子

の手本は、Cの子が「天地玄黄」（『千字文』の冒頭部分）、Dが「一筆啓上仕候」（手紙文の書き出し、『消息往来』の一部か）、Gが「松竹」（『名頭字』の一部か）、Iが「いろはにほへ」などとすべて異なり、門人の一枚に書く行数や文字の大きさも全く異なっている。



図 享和3年(1803)『撫育草』の挿絵

いっぽうで、描かれた手習い子の文字が平均的である絵画も少なくない。天明元年（1781）『孝経童子訓』所載の「書学之図」では、男子7名・女子4名の手習い子が描かれているが、門人の手本は、いずれも消息文の一部が書かれレベルが一定となっている点是不自然である。埼玉県加須市徳性寺に所蔵されている絵馬には、13名の手習い子が描かれているが、ほぼ全員が三行にわたって文字を書いている。書かれている文字は不明だが、行数が同じであることから、レベルが一定に想定されているといえ、違和感を持たせる。これらが史実を反映したものか、絵画としての構図を優先したものか、判断しがたい。

黄表紙の絵画を歴史資料として使用するには、いっそうの注意が必要である。享和2年（1802）『多羅福長寿伝』八ウ九オの絵では、画面右側に描かれた師匠の後ろに書物箱が置かれ、その表書きが「經典余師」となっている。經典余師とは、漢籍の白文だけでなく読み方や意味まで書かれているもので、自学自習のために利用された。手習塾師匠を勤めるような者であれば漢文を白文で読めてしるべきだろうが、經典余師を利用せざるを得ないような師匠が実在したことは充分考

えられる。しかし、この絵は史実を反映しているというより、師匠を揶揄して描かれている可能性がある。黄表紙の挿絵を事実として素直に受け取ることはできない。

絵画構図は挿絵として繰り返し利用されることがあるので、最初に使用された時期を特定する必要がある。作者や絵のジャンルによって描写に共通性があることに注意する必要がある。風俗画としての手習塾図では、門人がふざけていたり、机の並びが不規則に描かれる傾向がある。

以上5点にわたり述べたように、絵画にはジャンル、作者、時代によって一定の傾向がある。絵画を歴史資料として使用する場合には、それがどういう種類の絵であるか、誰に向けて、なにを目的として描かれたかを考慮する必要がある。また、多くの似た絵を集めて比較検討することが必要となってくる。

黄表紙以外の書物の挿絵として描かれた、17世紀末から19世紀半ばまでの手習絵画資料18点(18世紀末以降13点を中心)に分析対象を限定し、その描き方を詳細に検討することによって、作者・画工ならびに当該社会の手習塾についての通念や共通理解を照射できる。師匠が床の間の前や画面最上位に位置する場合(図参照)が多いことが明らかとなる。すなわち、18点中9点が、師匠を床の間の前に座らせている。床の間はその部屋の格式を示し、床の間の前に座ることは座る人の権威を高めた。師匠を床の間の前に位置づけて描く描き方は、師匠主体の画面構成を意図しているといえ、それは当時の師匠の社会的位置を物語っている。また、師匠は机、書物(箱)、筆筒などとセットで描かれる場合が多い。床の間の前に座ることや、机、書物などのモノが手習塾師匠をコード化しているとも言える。

(2) 学習環境

物的環境については、机の並べ方は教場の広さや門人数、採光との関係などにより区々で、一定の傾向を指摘することはできない。

絵画資料から読みとれる人的環境について、6点が指摘できる。

第一に、手習塾では異年齢集団から構成された男女が別席別手本で学んでいた。

第二に、師匠と対面して素読指導を受けている門人が羽織あるいは袴を着用している事例がある。絵画資料18点中3点では袴を、2点では羽織を着している。素読に際しては正装をすることが求められる場合もあったのだろう。ただし、羽織や袴を着して手習いをする絵画はわずかな例があるのみである。手習いの際に邪魔になりそうな着物の袖をまとめるために、紐をたすきがけに結んだ門人は、書物の挿絵には描かれない。手習い子は筆の上方を持ち、肘や腕を机につけずに浮

かした状態で書けば、たすきがけをする必要がなかったのかもしれないが、無作法として避けられた可能性も否定できない。

第三に、手習塾での座席位置は成績により決められていた。『撫育草』の挿絵では、『千字文』冒頭部分を唐様で書いている門人や消息文「一筆啓上仕候」を書いている門人が師匠の近くに座り、「いろは」や名頭字の一部を書いている門人が離れた席にいたので、上級者ほど師匠の近くに位置したことがうかがえる。

第四に、手習い子は左右の足をそろえて座る「正座」や両足を少し外に開く亀居座りをしているが、それほどきちんと足をそろえているようには見えない。明治時代の学校とちがいで、手習塾での身体統制は比較的ゆるやかであったといえよう。それでも手習塾を通じて、一日の半分以上を机にむかって足をそろえて座るという習慣が子どもに普及したことは確かであった。中世の絵巻物などにおいては、机に向かうのは僧侶がほとんどであった。江戸時代には畳の普及とともに正座が普及したといわれているが、手習塾での文字学習は机に向かって正座する習慣を一般民衆に普及させたと考えられる。

第五に、一般的に手習いの場面に左手で筆を持つ者は登場しない。左利きの門人は手習いするときには右手で書くように矯正されたと考えられる。机上の右に硯を、左に手本を置くという配置が必ずとられているのも、左手で筆を持たないことが前提となっていたからこそ可能だったのだろう。左利きの矯正にしても、門人ひとりひとりの身体が、手習塾を通して、社会的な規範に応じた身体に変えていかれたといえる。

第六に謡の場面を描いたものがある。草双紙の挿絵ではあるが文化4年(1807)の『敵討大悲誓』には、一日の手習いを終えた門人6名が机を壁ぎわに積み上げたあと、師匠の前に正座し、謡の稽古をしているようすが描かれている。祝宴などの場で謡うことが社会的交際上必要とされた江戸時代後期において、手習塾での謡指南は社交作法を身につけさせる機能を担っていたといえる。

以上のように、師匠主体の絵画構成や座席順位、門人の容儀や姿勢、小謡指南の図から、手習塾は手習いの教場であると同時に、身分制社会における人間交際の規範を体得する場として認識されていたと考えられる。

手習塾の、子どもやその親のニーズに対応し、模倣と習熟を基本とした、学習者主体の個別学習形態には比較的良い評価が与えられてきた。近代学校での画一的斉教授と対照的な手習塾にこそ本来的な教育の姿を見出そうとする見方もある。しかし、手習塾における師匠主体の個別学習は差別的な形式

ともいえる。手習塾で子どもたちは時空間を共有しながらも、目線は常に机の上の紙に注がれており、相互の学び合いなどは期待できない。身分制社会の枠内での学習形態であったといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 鈴木理恵 「手習塾の学習環境—近世後期の絵画史料分析を通して—」『教育学研究紀要』(CD-ROM版)、査読無、第55巻 2010、pp. 12-17
- ② 鈴木理恵 「近世後期、神職の在京生活と交遊」『広島大学大学院教育学研究科紀要』、査読無、第三部第58号、2009、pp. 17-26
- ③ 鈴木理恵 「境界域史の可能性—長崎と朝鮮半島南部の地域史—」『長崎大学教育学部社会科学論叢』、査読無、第70号、2008、pp. 31-46

[学会発表] (計1件)

- ① 鈴木理恵 「手習塾の学習環境—近世後期の絵画史料分析を通して—」 中国四国教育学会、2009年11月22日、島根大学

[図書] (計1件)

- ④ 鈴木理恵、他、思文閣出版、『知の伝達メディアの歴史研究』 2010、pp. 97-130

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 理恵 (SUZUKI RIE)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：80216465

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：